

中高生を対象とした地域間交流における夜のネイチャーゲーム実践

～本別・南三陸ふるさと交流研修会を事例に～

2025 年 3 月 31 日

永末 透威（北海道本別町）

1. はじめに

本別・南三陸ふるさと交流研修会は、北海道本別町と宮城県南三陸町が昭和 60 年から継続して実施している地域間交流事業である。本事業は「自然や社会環境の異なる地域との交流を通して、共同生活・体験活動の中から少年活動に必要な知識・技術を習得するとともに、異なる文化や価値観を理解し、郷土に対する愛情を育て、明るく住み良いまちづくりの視点に立った少年活動のリーダーを養成すること」を目的とする。毎年、夏期は本別町から南三陸町へ派遣、春期は南三陸町から受入しており、1985(昭和 60)年から数えて 40 年目を迎えた。

令和 6 年度(春期)の開催にあたり、本事業を主催する本別町教育委員会の社会教育担当から交流活動および施設見学の際に協力してほしいと依頼を受けた。協力内容は交流活動としてネイチャーゲームによる自然体験活動と施設見学として本別町歴史民俗資料館の見学対応の 2 点である。担当職員と当日の内容を打合せする中、夜ならではのネイチャーゲームがあることを伝えたところ、興味深く、見てみたいという反応があり、交流活動として夜のネイチャーゲームを実施する運びとなった。

本稿は第 40 年次本別・南三陸ふるさと交流研修会において、地域間交流と北海道(十勝)の夜の自然を体感することを目的に実践した夜のネイチャーゲームの事例報告である。

2. 事業概要

- ①事業名 令和 6 年度 第 40 年次 本別・南三陸ふるさと交流研修会
- ②主 催 本別町教育委員会(北海道)、南三陸町教育委員会(宮城県)
- ③対 象 各町内の中学 1 年生～高校 2 年生
※ジュニアリーダー活動の経験は不問
- ④会 期 2025 年 3 月 26 日(水)～3 月 29 日(土)、3 泊 4 日
- ⑤場 所 本別町内および帯広市各所

事業内容はレクリエーション等のジュニアリーダー活動、ネイチャーゲームによる自然体験活動、本別町内での屋内スポーツ体験、各所施設見学、親睦交流会等である。

筆者は本事業 3 泊 4 日の行程のうち、3 月 26 日(水)交流活動：夜のネイチャーゲーム、3 月 27 日(木)施設見学：本別町歴史民俗資料館見学を担当した。

3. 当日の実践内容

ネイチャーゲームによる自然体験活動は3月26日(水)、交流活動として宿泊先：帯広市児童会館が位置する緑ヶ丘公園内で実施し、中高生13名(中学生9名、高校生4名)が北海道(十勝)の夜の自然を体感した。活動内容の詳細は下記、表1を参照されたい。

表1) 夜の交流活動：ネイチャーゲームによる自然体験活動のスケジュール表

時 間	活動内容	アクティビティ名	実践上の留意事項等
19:00～	挨拶		
19:05～	活動① 落ち葉や雪等が堆積する場所を歩きながら、活動場所まで移動。	<目かくしイモ虫>	(1)列が長くなるため、参加者の安全管理を引率者に担ってもらう。 (2)目を閉じて歩くことに恐怖を感じる場合は、一時的に目を開けて良い。バンダナは不使用。
19:15～	活動② 夜の森で1分間目を閉じて、聴こえてくる自然の音を数える。	<音いくつ>	(1)<目かくしイモ虫>の分かち合いの際に、音を聴くことの面白さを伝えておく。
19:20～	活動③ 夜の静寂を感じつつ、夜行性の動物の行動を体験する。	<暗闇を照らせ>	(1)全員が1列で並べる範囲を確保できない場合は、2班に分けて実施する。 (2)引率者を見張り番として、アクティビティを1度練習する。 (3)見張り番は音がした方に懐中電灯を照らす「あたり」「はずれ」の判定はせず、音が聴こえなくなったら明かりを消す。残りの人は明かりがついていない時だけ、移動可能とする。
19:40～	活動④ 夜の自然の中で、森の静けさや星空の神秘さを感じ、夜の森ならではの自然時間を班毎に過ごす。	<夜はともだち>	(1)同じ場所で同じ時間を過ごし、感じたことを分かち合ってもらいたい、1人ではなく班単位(4～5名/班)で配置する。 (2)静寂を感じてほしい活動であるが、班単位での活動であることを考慮して、体験に関する話題かつ静かな雰囲気を壊さない程度の会話は良いものとする。
20:00～	全体の振り返り・アンケート		

翌27日(木)の朝、本別町へ移動する前に活動場所を再度訪れ、日中の様子を観察した。加えて<音いくつ>を昨夜と同じ場所で行い、時間帯による音の違いを捉えた。

4. ネイチャーゲームを体験した参加者の反応・感想

4.1 アンケート回答(抜粋)から見る参加者の反応

筆者は夜のアクティビティ実践が初めてであったため、今後の実践における指導の質向上および参加者の反応の可視化を目的として、アンケート調査を実施した。調査内容は夜のネイチャーゲームを体験した感想を記入するだけの簡単なものとし、自由記述形式で回答を収集した。以下に感想を抜粋して記した。なお、文末を「です・ます調」に統一した他、プライバシー保護の観点から回答者の属性は「町名／学年」のみの記載とした。

回答①(南三陸町／中学3年生)

今日のネイチャーゲームはとても楽しかったです。特に印象的だったのは自然を間近で体験したことです。普段、自然の音を真面目に聴くことがなかったので、今回の体験を通して、自然に対する興味が湧いたり、触れ合い方を知ったりできました。宮城に戻ったら自然の音を聴いてみたいと思います。来年もできたらしたいです。

回答②(南三陸町／高校2年生)

夜に星を眺めることはあっても、音を気にしたことはなかったので、新鮮な体験で楽しかったです。目を開けている時に聞こえている音は、目を閉じている時に比べて本当に少ないと実感でき、夜の森は思っていたより静かだったことに気がつきました。自然の音はリラックスできるとよく聞いていたけど、実際に雪を踏む音等を聴いてリラックスできました。南三陸町は帯広市ほど寒くはないけど、聴こえてくる人工的な音、木の音、雪の音は同じなんだと思いました。また、地域が違っても夜空に見える星は同じことに改めて感動しました。

回答③(本別町／中学1年生)

風が強くて寒かったけど、目を閉じて耳を澄まして自然の音を聴くと精神が安定したように感じました。今度、休日にやってみます。

回答④(本別町／中学2年生)

耳を澄ませば、こんなにも沢山の音が聴こえるのかと思いました。また、普段聞いている何気ない自然の音でも改めて聴くといい音だなと感じました。

回答⑤(本別町／中学2年生)

とても寒かったけど、その分、帯広市の夜の自然を感じることができました。音を立てずに忍び足で歩くことはとても難しかったです。なので、懐中電灯で照らされないように頑張ってジッとしていました。南三陸町の人と一緒に夜空を見ることができて良かったです。

回答⑥(本別町／高校1年生)

夜にやるネイチャーゲームは初めてだったけど楽しかったです。今回は冬の夜だったけど、夏の夜や昼間だと、また違った音が聴こえるのかなと思いました。五感のどれか1つだけを研ぎ澄ませて活動することは大切だと感じたし、ジュニアリーダー活動のレクリエーシ

ョンを考える時等に活かせるなと思いました。

4.2 行動観察に基づいた参加者の反応

＜目かくしイモ虫＞：本来であれば声を発さずに活動を行うところだが、今回は地域間交流に主眼を置いたため、感じたことを声に出しても良いこととした。活動中「フカフカしている」「ガサガサ音がする」等の落ち葉が堆積している感覚を表現する声や「ザクザク」「冷たい」等の薄く残った雪に関連した声が多く聞かれた。中には枝を踏んだ「パキッ」という音を聴き、何を踏んだのか想像する様子が見られた。翌朝、実際に歩いた経路を示した際には「夜に歩いた時よりも距離が短く感じた」といった反応が多かった。

＜音いくつ＞：この日は風が強かったこともあり、風に関連した音が多く聴こえたようだ。風の「ビュー」という音、風で軋む木々の「ミシミシ」という音、枝先に残った葉が揺れる「カサカサ」という音等である。その他、遠くの方で自動車を通る音が聴こえた。「耳を澄ましてみると、想像していたよりも様々な音が聴こえた」という声や「リラックス」できたという声が多く聞かれた。翌朝、同じ場所で再度実践した際には、複数種の野鳥の鳴き声が聴こえ、昼行性動物の活動が始まったことを体感していた。「同じ場所でも時間帯によって聴こえる音が違う」ことに気づいた反応が多く、夜と朝の2回、自然の音を楽しんでいた。

＜暗闇を照らせ＞：活動範囲は落ち葉の堆積とササ類の生育が見られる環境、薄い残雪が見られる環境が混在する場所で設定した。そのため、移動時に落ち葉や枝を踏む音、ササ類が擦れる音、雪を踏む音等、多様な環境を越える必要があった。練習時、楽しみながらも「難しい」といった声が多かったものの、物音を立てないように敢えてその場でジッとする参加者や懐中電灯が消えた瞬間に一気に駆け抜ける参加者等、様々な戦略的行動が見られた。今回は、捕食者(見張り番)と被食者という関係を設定に加えたため、捕食者に食べられない(懐中電灯で照らされない)ように生き残る工夫をしていた。

＜夜はともだち＞：今回は1人ではなく、同じ場所に複数人を配置した(班単位での実践)。班員全員で、木を囲むようにしゃがみながら夜を体感する様子、雪山を踏んで音を楽しむ様子、星空を眺めて地域が異なっても見える星は同じであることに感動する様子が見られた。参加者は同じ場所でも同じ時間を過ごし、夜の森での発見や感動を共有していた。



写真) 班単位で＜夜はともだち＞を実践する様子

5. 考慮すべき課題

5.1 気象条件の地域間差異を考慮したリスクマネジメント

地域間交流において、参加する地域間の寒暖差や気候の違いに配慮した事前準備が必要である。本事例は北海道と宮城県の気象条件が比較的類似した地域間での交流であったため、それほど気にしなかったが、降雪に伴う冬の寒さに慣れていない地域との交流であった場合、活動後に体調を崩す可能性が高い。そのため、活動後の体調への影響を考慮したリスクマネジメントとして、例を示しながら暖かい服装の準備を事前周知する必要や活動時間の調整、身体を温める行動をプログラムに組み込む必要があるだろう。

5.2 夜のアクティビティ実践における下見の重要性

アンケート回答の中に「段差が怖かった」「木が刺さって危なかった」という感想がいくつか見られた。プログラム全体を通しては「新鮮で面白かった」「音に集中できて楽しかった」と満足感を得ていたものの、いずれも活動中の一部を切り取ったものとして、筆者の危険予知に不足があったことを示す意見である。活動時の行動観察から、おそらく＜目かくしイモ虫＞実践時のものと推察される。日中と夜の雰囲気の違いを考慮して、目隠しで歩く経路の設定において、日中の下見だけでなく、夜(活動前)の再下見が必要であったと反省している。また、「ここに段差があるよ」「頭上に枝があるから気をつけて」等の活動中の声掛けや「落ちている枝等が刺さらないようにしっかりと足を上げて踏みしめるように歩こう」のように歩き方の注意事項を事前に伝える必要があるだろう。

5.3 引率者あるいは同行者に対する実践上の留意事項等の共有

交流活動中、両地域の引率者(各2名)が写真記録を主として同行した。＜暗闇を照らせ＞から＜夜はともだち＞への移行時、全体に対して夜の自然を静かに味わってほしい旨を伝えていたにも関わらず、＜夜はともだち＞の終盤、引率者が実践中の子どもたちに声をかけ会話が弾んでしまい、静かな雰囲気が壊れてしまう様子が見られた。北海道(十勝)の夜の自然を介して、交流を図ることに主眼を置いたため、多少の会話は良いものとしていたが、静かな雰囲気を壊してしまうような話題や会話は避けたかった。筆者は、引率者はあくまで写真記録のための同行であり、プログラム進行への介入はないものと認識していたが、筆者と引率者間における認識のズレが招いた事象である。そのため、引率者や同行者に対するプログラムの流れや活動の目的、実践上の留意事項等の共有と認識の一致を図る時間を事前に確保することが重要である。

6. 本報告を参考にされる方へ

聴覚を研ぎ澄まし、自然の音や静かな自然時間を楽しむ活動は、子どもたちにとって非日常的で新鮮だったようです。アンケート回答には「今度、休日にやってみます」「宮城に戻ったらやってみます」「来年もできたらしたい」等の声が多く、今回のネイチャーゲーム体験が自然とのふれあいを非日常から日常に変えるきっかけになったのではないかと感じています。また、体験を通して今後のジュニアリーダー活動に向けた様々なインスピレーションが湧いたようです。風の強かった北海道(十勝)の森での活動でしたが、静かな夜の森で異なる地域の子どもたちが同じ時間を過ごしたことで、共通の思い出として刻まれ、地域間交流に花を添えることができました。加えて事業の目的である少年活動に必要な知識・技術の習得の一助となったことでしょう。

上記のように地域間交流としては大成功でした。一方で、初めて夜のネイチャーゲームを実践した指導員としては失敗です。プログラム計画・進行上の反省点が多く、日中と夜の勝手の違いを痛感しました。前項の【5. 考慮すべき課題】に記した内容は指導員としての反省点です。もし、夜のネイチャーゲームを実践することがあれば、計画時・事前準備時の参考にしてください。